

悪役令嬢？ 何それ美味おいしいの？

溺愛公爵令嬢は我が道を行く2

◆ミカエル&ジブリール◆

三兄・四兄。常に二人で行動する、
悪戯好きの双子。

◆キース◆

次兄。正統派の
クールビューティーで、
智謀に長ける。

◆シルヴァイン◆

長兄。勉学、剣術、
魔法のすべてを
完璧にこなす天才肌。

◆ノアーク◆

五兄。魔法が
使えないという
コンプレックス持ち。

◆ノクス◆

ルーナの弟。姉と共に
マリアローゼに恩返しすべく、
侍従を目指している。

◆ルーナ◆

マリアローゼに助けられた元孤児。
今は侍女見習いとして
公爵邸で働いている。

◆マリアローゼ◆

過労死した会社員の前世を持つ、
公爵家の令嬢。溺愛してくる両親と
五人の兄達との生活を大事にしつつ、
「悪役令嬢」の破滅ルートを
回避するべく奮闘中！

人物紹介

第一章 神聖国の魔手

幼女の朝は早い。

アウアリティア王国の筆頭公爵家であるフィロソフィ公爵家の庭では、末娘のマリアローゼが朝早くからとことごと歩いていた。清廉な光を含む銀色の髪は、毛先が蜜色に染まり、くるんと巻いている。瞳の色は両親の色を合わせた淡い青紫色で、見る者をハッとさせるほど美しい。今はドレスと言うには簡素な服で庭を闊歩^{くわぽ}していた。

その横に並び立つのは、元冒険者である護衛騎士のカンナである。母の実家フォルティス公爵家の傍流の出であり、燃えるような赤髪はフォルティス家の所縁^{ゆえん}のものだ。

後ろには、マリアローゼと同じく動きやすい服に身を包んだ幼い姉弟、ルーナとノクスが続く。

孤児だった彼らは、事件に巻き込まれて瀕死の状態だったところをマリアローゼに救われた。今は公爵家に身を寄せ、将来マリアローゼの侍従と侍女になるべく、勤勉に働いている。

仕事が終わった後は、マリアローゼと五人の兄達と共に言語の勉強をしている。更に、マリアローゼの父ジェラルドの侍従であり、スーパー執事のランバートから英才教育も受けていた。

体力作りのための運動が終わると、マリアローゼは軽く湯浴みを済ませてひと眠りした後、朝食

に訪れる。

「おはようございます、お父様、お母様」

「おはようローゼ」

「おはよう、わたくしの可愛い天使ちゃん」

大好きな両親に笑顔で迎えられ、マリアローゼも可愛い笑みを浮かべる。

父ジェラルドは宰相という激務に就きながらも、朝食と晚餐の席には必ずいて、家族との時間を作っていた。銀の髪はすでに仕事用に後ろに撫でつけられているが、冷たいと称される薄氷色の瞳を優しく細めている。

そんな夫を支えるために、母ミリリウムも社交に余念がない。

緩く波打つ黄金色の髪と紫色の神秘的な瞳を持ち、社交界の白薔薇と呼ばれる美しさは本日も健在だ。今日は青銀色のドレスに、銀色の宝飾品を付けている。

「おはよう、ローゼ。今日も可愛い笑顔が見られて嬉しいよ」

甘い表情を見せるのは長男のシルヴァイン。母譲りの金髪と父譲りの薄い青の瞳で、王子と言われているも遜色のない美しさと精悍さを兼ね揃えている。

（またお兄様は私をからかって……！）

ふんす、とマリアローゼは息を吐いた。

「お兄様、おはようございます。でも、そういった言葉は好きな女性に贈られませ」

「そうかい？　じゃあ君に贈っても問題ないね」

（ライクじゃなくてラブという意味なのに！）

だが、にやにやと楽しそうに笑う兄には勝てそうにない。マリアローゼは早々に白旗を上げる。

「遺憾に存じますわ……」

マリアローゼの精一杯の返答に、シルヴァインは軽く笑って肩を竦めた。

「ローゼ、おはよう。よく眠れましたか？」

丁寧言葉をかけてきたのは、次男のキースだ。父の生き写しと言われるだけあって、銀の髪も薄氷色の瞳も冷たい印象を与えるが、マリアローゼを見る目は優しい。

「はい、キースお兄様。とてもよく眠れましたわ」

キースはマリアローゼの返事に、優しく微笑んで頷く。

「おはようローゼー」

声を揃えて挨拶したのは、三番目と四番目の兄である双子、ミカエルとジブリールだ。母を飛び越えて引き継いだ、フォルティス公爵家を象徴する燃えるような赤髪に、海と同じ鮮やかな青の瞳の少年達である。朝から元氣いっぱい挨拶されて、マリアローゼの顔も綻んだ。

「おはようございます。お兄様達。今日も朝から元氣ですね」

双子は嬉しそうに顔を見合わせて笑う。

「おはよう……ローゼ」

「ノアークお兄様、おはようございます」

最後に声をかけてきたのは、マリアローゼのすぐ上の五番目の兄のノアークである。口下手で寡

黙だが、いつも妹を気にかけてくれる優しい兄だ。魔法が使えないことを気にしているが、マリアローゼにとつてはそのことは取るに足らない。

黒に近い紅の髪と、黒に近い藍の瞳は、色は違えどフォルティス公爵家でよく見られる色だが、周囲からは異端と思われる容姿だ。魔法が使えない「無能」としての評価も合わさって、陰で出来損ないと揶揄されることがあるという。表向きそう言われないのは、両親が仲睦まじく浮気の可能性がないことと、家門の絶大な権力のおかげだろう。

口さがないのはむしろ、親よりも子供達の方だ。そのことで、従兄である第二王子ロランドに罵倒されたこともある。

だが、マリアローゼにとつてはどの兄もそれぞれに魅力的で、大きな存在だ。

王城でロランドの兄である第一王子アルベルトと出会った直後に転び、前世の記憶を思い出してからも、ずっと。

この世界が小説の中の世界だろうとゲームの中の世界だろうと、今は関係ない。最初は破滅ルートを回避するために婚約者となる運命だったアルベルトを避けようと思っていた。けれど、生活を共にしていくうちに何よりも家族が大切になり、ずっと側にいたいから、誰とも婚約したくないと思っている。

改めて幸せを噛みしめつつ、マリアローゼは朝の光が差し込む食堂で、家族団欒の時を過ごした。



その日の執務室では、ジェラルドがうーんと唸っていた。

とうとう、ルクスリア神聖国からマリアローゼ宛に招聘の手紙が届いたのである。ルクスリア神聖国は、各地に顕現した聖女を招く権利を有している。宗主国として全世界に数多くの信者を持つからこそその権力だ。表向きの理由は保護だが、聖女は神聖国から出ることを許されない。神聖国がその稀有な能力を管理するためである。

聖女とは奇跡を起こす能力を持つ者とされていて、その治癒力は治癒師のそれを遥かに超える。

どんな病でも治し、失った四肢の再生や死人の蘇生にまで及ぶ。故に聖女は貴重な存在となり、各国の王族の危機に見える神の恵みを与えていた。

ただし、例外はある。

一つは複数の聖女がいること。もう一つは他国の王族との婚姻、もしくは婚約した場合に際してだ。

現在、神聖国には聖女はいないが、聖女だと噂されている少女はいる。男爵家の庶子であり、現在養女として引き取られた元は平民の少女だという。

それに、ルクスリア神聖国を無下に扱うことは出来ない。

神聖国では、統治者を王でなく国主と呼んでいる。元を辿れば、その出自はアウアティア王国の公爵だ。王家ではあるものの、今でも対外的な家格は公爵である。他国の王族より身分が低いとされているが、多くの信者を抱える神聖国の権力は、小国とはいえ絶大だ。それを束ねている教会

も同様で、ジェラルドがこの招聘を拒否することは不可能だった。

(それでも手放すことは絶対に考えられない)

ミルリーリウムとジェラルドが切望した娘であり、この世の全ての美しい物を詰め込んだような清らかな子だ。

ジェラルドはマリアローゼを思い浮かべながら、近くに控える執事のランバートに声をかける。

「あの時のローゼを見たかい？ あの双子をいとも簡単に手懐けるとは」

「諫めることなく場を取めた手腕には、感銘を受けました」

「神聖国に行かせたくないな……」

「僭越ながら、私も同じ思いにございます」

その時、コンコン、と小さなノックの音がした。ジェラルドが応えた後、マリアローゼが顔を出した。挨拶を終えると、背伸びをして執務机に紙の束をドン、と載せる。

「これは……ん？」

パラパラと捲って確認したところ、キースとシルヴァインの筆跡で書かれている。どうやら、立ち上げようとしている商会の計画書のようだった。

「マリアローゼが何でこんなものを持ってきたんだい？」

「わたくしの商品を売りたいからですわ」

ふんす！ と胸を張って主張する娘に、父の目が点になる。

「商品」

マリアローゼの言葉を繰り返した後、ジェラルドは自信ありげな娘を見つめた。

「工房から報告が入っていませんでしたか？ ええと、クリスタさんとレノさんに一財産築けると言われまして、マローヴァさんとエミールさんからも保証をいただきましたの」

商会の会頭を代理で務めるマローヴァと、彼の代わりに公爵邸に訪れたエミールは抜け目のない人物だ。それに、王城にも出入り自由な御用商人でもある。その彼らが保証したというのなら、ただのおためごかしではなく、売れる商品なのだろう。

「ふむ、商品の説明は彼らから聞くとしよう」

「まだ量産体制も整っていませんし、貴族向けと庶民向けの商品を作るので、両方仕上がりましたら、改めてお父様にお問い合わせに参ります」

にこにこしながら大人顔負けの商魂を見せる、未恐ろしい五歳児である。

「本当は聞かせたくない話だが、今してしまおうか……」

優しい目で娘を見つめていたジェラルドの瞳が悲しげに翳る。

「実は、君が聖女としてルクスリア神聖国に招聘されることになった」

頭がハテナでいっぱいになったのか、不思議そうな表情でマリアローゼは首をこてんと傾げた。

そんな何気ない仕草ですら、ジェラルドの目には何よりも愛くるしく映る。

「でも、わたくし聖女じゃございませんのに？」

「椅子に座ろうか。少し説明するよ」

机から顔をひよっこり出すように立っていたマリアローゼを抱き上げて、ジェラルドは長椅子に

座った。そして、マリアローゼを膝に乗せて肩口に顔を埋めたまま呟く。

「リリイを」

うけたまわ
「承りました」

ランバートが出ていき、しばらくするとミルリーリウムが部屋に入ってくる。ミルリーリウムはジェラルドの隣に座り、寄り添うように娘と夫を抱きしめた。

「まずはノクスとルーナの話しよう。彼らを癒したことが、『聖女』だと判断された一番の理由だ。加害者のうちの一人が貧民街の神父だったんだよ。彼らは身寄りのない子供を養子に出す傍ら、奴隷としても売っていたんだ。それを暴こうとした二人を殺そうとした。しかし失敗した神父は、捕まる前に君を聖女として神聖国に推薦したんだ。もし聖女だと認められれば、神父の罪は免除され、地位も上がる。その一方で、聖女として認定された者は神聖国から出られなくなる」

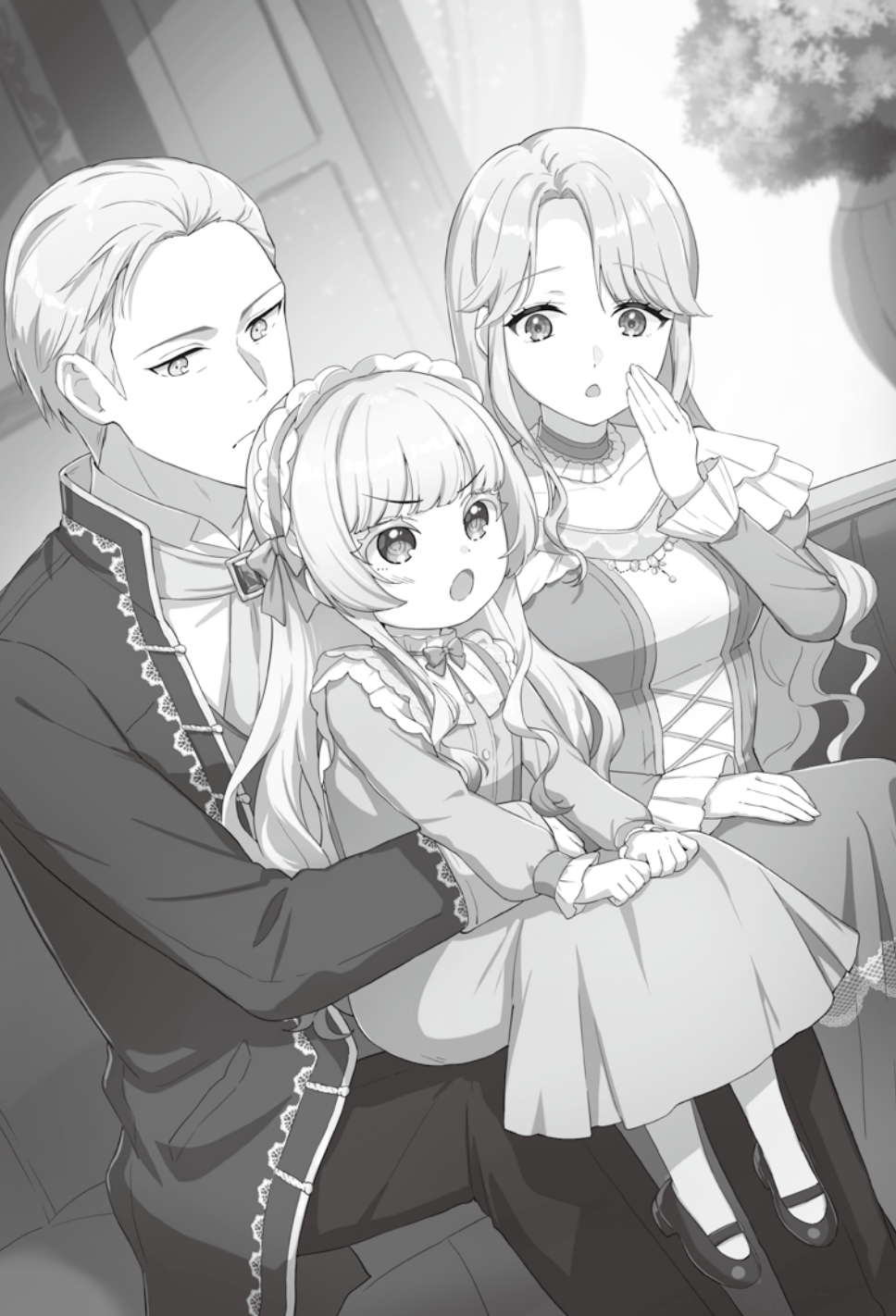
「……分かりました」

マリアローゼはこくりと頷いた。

何が分かったのだろうか？ と、ジェラルドは顔を上げてマリアローゼを見つめた。マリアローゼは強い意志の宿った目で見つめ返す。

「わたくしは聖女ではありませんし、犯罪に手を染めた者が無罪放免になるなんて、絶対に許しませんわ！」

その言葉は自身を案じるものではなく、正義の怒りで溢れている。
意表を突かれたジェラルドは、マリアローゼをまじまじと見つめた。



「叩き潰してみせますわ」

キツと眉を寄せて力強く言う娘に、ジェラルドは悲しみよりも驚きが勝ってしまい……うなづ掌を顔に当てて笑い出した。

「さすが、私とリリーの娘だ」

「わたくしも一緒に神聖国に参りますわ」

娘の決意を聞いたミルリーリウムも、ふんす！と胸を張って言う。

「えっ、でも君には予定が——」

「予定は未定と言うではありませんの。ローゼの方が絶対的に優先ですわ。それに、聖女でも聖女じゃなくても、わたくしはローゼを手放しません」

「そうか……そうだな。参ったな、日和ひよりつていたのは私だけじゃないか」

泣き笑いのような表情を見せて、ジェラルドは妻ごとマリアローゼを抱きしめる。

「王妃から、マグノリア・フィデーリス神殿騎士の同道を許可されている。直下の部下四名と公爵家の護衛騎士三名、王城からもアケル・フォルティス王宮第一騎士団長とその部下三名が同行する。ノクスとルーナも連れてくるよう神聖国側から要請があったので、彼らも一緒だ。それからカンナにも同行してもらおう」

「承知致しました」

「それから不測の事態に備えて、別途冒険者も雇うことにしよう。神聖国から迎えの護衛も来るので、あまり大所帯では行けないがね」

「十分ですわ、貴方」

「わたくし、絶対にお母様と戻って参りますから、お父様も無理はなさらないで」

ミルリーリウムは問題ないと力強く微笑み、マリアローゼは父の心配までしている。自分が思うよりも強い愛しい女性達に、ジェラルドは穏やかな笑みを浮かべると二人をぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう。ローゼ、リリー、愛しているよ」



神父の罪と、聖女の嫌疑がかけられたことに憤慨したものの、マリアローゼはその日珍しく父と母の間に寝て、朝にはすっかり機嫌が直っていた。

二、三日中にはルクスリア神聖国の護衛が到着するという。今日の午後には、公爵家が準備した随行人が別邸へと集まる手筈てはずになっていた。理由をつけて招聘しょうへいを引き延ばすことは出来るらしいが、面倒事は早く済ませてしまいたいのもある。

だが、準備に時間もかけたい。マリアローゼにとつて、これから向かうのは一大宗教の総本山。戦うにしても知識が足りなければ、足下すくを掬すくわれてしまう。

「お父様、準備に一週間くださいませ。わたくし、神聖国について徹底的に勉強しなくては。家の図書館にない資料が王宮にありましたら、出来ればお借りしたいです」

「分かった。全て君の気の済むようにしなさい」

「ありがとうございます」

朝食の時に神聖国への招聘しやうへいを聞かされた兄達もまた、突然の事態に驚いているようだった。説明を黙って聞いていたシルヴァインが、父上、と呼びかけた。

「俺もローゼの手伝いをします」

「僕も手伝いましょう」

シルヴァインの申し出にキースも続き、父は重々しく頷いた。双子は二人でうんうんと頭を悩ませていたが、今まで勉強から逃げ回ってきた自分達は調べ物には役に立たないと思ったようだ。ノアークも同じく、しょんぼりとしている。

「手伝ってほしいことが出来ましたら、お兄様方にもご助力をお願い致しますわ」

マリアローゼの言葉に、三人はやる気に満ちた顔でうんうんと頷いた。一件落着である。

朝食後は図書館へ、二人の兄を伴ってマリアローゼは急いだ。あらかじめ連絡を受けていたのか、公爵家の図書館の司書であるヴァローナの出迎えで、神聖国関連の大量の書籍の載った机に案内される。ヴァローナは銀灰色の髪を緩く後ろで括くくつた美青年で、以前もマリアローゼを助けてくれた。「お爺様にも話を聞きたいけれど、これを読むのが先ですわね」

腕まくりをしたマリアローゼに、紫水晶の理知的な眼差しを向けたヴァローナが申し出る。

「アノス老には私が話を聞いておきましょう」

「ありがとうございます。では、神聖国と聖女について本に載っていない知識があればお聞きし

てね」

マリアローゼの言葉に、ヴァローナは静かに頷く。彼が立ち去るのを見送って、マリアローゼは手早く蔵書をより分けた。

基本的な知識がなければ、質問したいことすら分からないのだ。この図書館の長であるアノス老——フィスィアノスは、賢者とも呼ばれる老爺ろうやである。頭に毛がない代わりに山羊やぎのように白くて長い髭ひげが生えていて、歳のせいか日がな一日うつらうつらと眠っていることが多い。起きている時間が僅かなので、それを無駄には出来ないのだ。

(まずは焦らずに、基本的な情報を調べましょう)

「わたくしは聖女関連の書籍を中心に調べます。お兄様達は、わたくしが見た方がいい資料があれば教えてください」

「僕は神聖国の歴史を調べましょう」

「じゃあ俺はそれ以外を担当しよう」

ときばきと用意をして、三人は本を読み始めた。合間に昼食を済ませ、また読書に戻る。本当なら昼寝もするのだが、出来るだけ詰め込みたいので、限界までマリアローゼは頑張った。

そして、晩餐ばんさんの時に父から驚くべき話を聞いた。

神聖国にはすでに聖女候補が一人いるが、あくまで候補でしかない。もしマリアローゼが聖女だと認定されてしまえば、終わりなのだ。それを覆くつすために王家が提案したのは、第一王子アルベルトの婚約者として連れ帰るという策だった。

「マリアローゼが無事聖女ではないと判定されれば問題ないが、そうならなかった場合は婚約を盾にして連れ帰れるよう、第一王子殿下が同行する」

「でしたら、俺も行きます」

ジェラルドの言葉に、シルヴァインがすかさず名乗りを上げた。

「護衛騎士ほどとは言えませんが戦えますし、ローゼの兄でもあります」

(それは嘘)

マリアローゼはジト目でシルヴァインを見た。兄が騎士達と互角に戦ったのを、つい先日目にしている。公爵家の騎士達は、身分が上だからといって負けてあげるような鍛錬はしないのだ。

「分かった。リリイとローゼを頼むぞ」

「はい。お任せください」

マリアローゼにとって、アルベルトは関わり合いたくない相手No.1であったが、少し考えを改めた。だが、第一王子とはそこまで交流もない上に、彼にとってのメリットがあまりに少ない。

むう、とマリアローゼは口を尖らせた。

恋だの愛だのという間柄ではない。会ったのはたった二回。手紙を返したのもまた二回。これだけで恋愛に発展することなどないし、もしそうだったとしても何か幻影を見ているとしか思えないので、今のところはその要素は却下しておく。

(王国にとっても貴重な公爵令嬢だから？ 帝国にも他の国にも生粋の公爵令嬢がいなくてという影響は大きいのね)

さて、今日も早く寝よう、とマリアローゼは早々に眠りについたのだった。

翌朝気持ちよく目覚めると、枕元にまあある贈答用の箱が置いてあった。

丁寧にリボンもかかっているが、帽子を入れるには小さい。手に持ってみると、重さはそれなりにある。

「あの、お嬢様、そちらの箱は双子のお兄様が置いていかれました……」

「そうなのですね。開けてみますわ」

遠慮がちに言ったナーヴァは止めようとして、丸め込まれたのだろう。ナーヴァはマリアローゼの不寝番の一人で、寝ている間も近くに控えている小間使いだ。双子の攻勢に耐えられる人はそうそういない。それに夜中だったので、よほどの緊急事態でない限り、父に伝えることも難しい。

リボンをしゅるしゅる解いてパカリと蓋を開けると、そこにいたのは……

「まあ！ これは、スライム!？」

箱の中には、ぷるぷると揺れるスライムがいた。薄い青色のそれを突いてみるが、逃げるように身体を動かすだけで攻撃はしてこない。

(幼体なのかしら?)

掌サイズで、まるっとして可愛らしい。

(そうだ、あれを試してみよう！)

マリアローゼが思い出したのは、以前、従魔師のウルラートウスと交わした会話である。従魔を

使役するウルラートウスのところに捕獲の方法を教わりに行った時、彼が言っていた言葉。

『血は全身を巡る道みたいなんだ。そこに魔力を乗せて、相手に送り込む。必要なら相手からも取り込む。その方法で俺はこいつらと絆を結んでるってわけだ』

マリアローゼは箱の中の可愛い生き物を見ていた顔を上げて、恐々と遠巻きにしているナーヴァに声をかけた。

「針を持ってきてくださる？ あとクッキーと飲み物を」

「は、はい、ただいま」

慌てたように飛び上がって、パタパタとナーヴァが走り出す。筆筒の中から取り出した裁縫セットの針を渡されたマリアローゼは、ナーヴァが部屋を出ていった隙を見てそれを指に突き立てる。痛いのは嫌だけど、捕獲するためには仕方ない。指で押し出すようにして、やっと一滴、スライムに血を落とした。

（どうか、仲良くして）

祈るような思いを込めて、傷をつけた指で、マリアローゼはスライムの表面を優しく撫でる。

表面に落ちた血の雫は、やがてスライムの表面で溶け始めた。しばらく見つめて、何もなかったか……と思った瞬間、僅かに光を帯びる。気づけばスライムの色がピンクになっていた。

「まあ、なんて可愛いもの！」

思わずもう一度、今度は掌で撫でると、スライムが嬉しそうに手にまとわりついてくる。

「貴方に名前を付けてあげるわね。……そうだ、わたくしと同じ名前にしましょう。今日から貴方

はロサよ」

ローゼは古い呼び名でロサと言う。それをスライムに与えたのだ。

ロサは幸せそうに、くねくねと身を動かした。

「あら、嬉しいのね？ これからクッキーもあげますからね」

ナーヴァが戻ってくると、マリアローゼは早速クッキーを半分に分り、スライムの横にちよこんと置いた。ロサが身体を伸ばしてクッキーを覆うと、クッキーが身体の中で溶け始めた。それを見ながらマリアローゼも、さく、さくとクッキーを齧る。

「もっと欲しい？」

問いかけると、ロサは背伸びをするように縦に伸び縮みした。マリアローゼは今度はクッキーをそのまま、ロサの上に載せてみる。するとロサの上に置かれたクッキーは、ゆっくりと身体の中に沈み込むように溶けていく。

（さて、隠蔽工作をしないといけないわね。ナーヴァはいいとしても、エイラはこの状況を許してはくれなさそう）

「ナーヴァ、この箱を片づけてくださる？」

「承りました」

ナーヴァは恐々と箱を抱えて筆筒の中に仕舞い込んだ。その間に、マリアローゼは箱から出したスライムをとりあえず枕の下に忍ばせる。

「急いで着替えを」

ナーヴァはお辞儀をして、そそくさと着替えの支度に取りかかる。まだコルセットはいらないので、そこまで手間はかからない。

すぐに着替え終わると、枕の下のロサを胸元に入れる。

「動いちゃだめよ」

ロサにだけ聞こえるように言って、マリアローゼは紅茶を飲んだ。そして今日の予定を立て始める。

（図書館に行くのは決定事項だけど、その前にウルラートウスに会いに行つてスライムの話聞いてみたい。きちんとタイム出来ていると思うけど、確信が持てないし。次にマリクのところへ行かなくちゃ。一応手当しないよね）

針で突いただけの小さな傷だが、膿んだら困る。

（ウルラートウスは夜勤だから、もう寝てしまいかもしれない。急いで行かなくちゃ）

「出かけて参ります」

「あ、お嬢様……」

呼び止めようとするナーヴァを少し振り返って、マリアローゼは微笑んだ。

「すぐ戻りますから大丈夫ですわ」

ととととと走っていくマリアローゼの付き添いを近くにいた従僕に頼むと、ナーヴァは部屋に戻って後片づけを始めた。

以前に通った庭へ出る通路を走り抜け、庭に飛び出して従業員に住む家の側を駆け抜ける。

マリアローゼは従魔師の棲家に駆け寄り、たむたむと扉を叩いた。

「んだよ、うるせえな」

ぶつきらぼうに言いつつも、ウルラートウスは迎え入れてくれた。

異国の血が混じった褐色の肌に、銀髪、赤い瞳の隻眼の美青年である。声音と同じく面倒そうに眉を顰（も）めているが、マリアローゼのために扉を手で支えている。

「見て！」

マリアローゼが胸元に手をつ突っ込んだのを見てぎよつとするウルラートウスの眼前に、ピンク色のスライムを差し出す。

「は？ タイムしたのか？」

「出来てますか？」

「見た感じ、出来てるようだが、こりゃ珍しい色してんなあ」

「最初は薄い水色だったのですけれど、血を与えたら可愛らしいピンク色になりました」

マリアローゼの言葉を聞いた途端、ウルラートウスが再び眉を顰（も）めて怖い顔をする。

「それ、誰にも言うんじゃねえぞ。……公爵様には俺から言っておく」

低い声でウルラートウスが言う。

マリアローゼはその様子に、きよんとした顔で背伸びする。

「どうしてですか？」

「お前の力はタイムしたと同時に魔獣を変異させてるんだ。もし、お前の血で強い力を持つ魔獣に

変異させることが可能なら、間違いなく悪い奴らに狙われる。強力でなくても……能力に変化を起こせるなら、同じかもしれねえ。血だけじゃなくお前自身が必要だとしても、狙われるのは一緒だろうな」

まあ、鑑定してみねえと分からねえが……と腕組みしてウルラートウスはぶつぶつと呟く。
(確かに異質な力よね。生物の変化を引き起こすんだから。他国からも狙われるのかしら？ とにかく神聖国に知られてはまずいことは確かね)

「鑑定はどなたが出来ますか？」

「鑑定士って特殊な魔法使いもいるが、従魔師の中にも従魔の鑑定が出来る奴がいる。俺は無理だが、この屋敷にも何人か雇われてっから、中にはいるかもしれないねえな。しばらく様子見て、その変化が定着したようなら公爵様に聞いてみる」

親切に説明してくれるウルラートウスに、マリアローゼはこくん、と頷いた。

「分かりましたわ。ありがとうございます」

「しかし、稀有な力だな。よく分からんが、やべえのだけは分かる」

(ふむ？ 小説では魔力は絶望的だったはずなのに、後付けで出てくる設定だったのかな？)

しかし、表紙でモンスターと一緒にいるイラストは見たことがない。イケメンとの2ショットばかりだったはずだ。ただ、絵面的にイケメンと二人だけになった可能性は捨て切れない。

(モンスターと2ショットの悪役令嬢というのは、確かにあまり引きにならないさそうだもんね)

「お父様にお伝えするのはお任せ致しますね。あと、この子を隠したいのですけれど……」

「スライムは擬態が出来るから、アクセサリーか服の一部にでもすりゃいい。それも含めて公爵のダンナには言っておく」

「まあ、ありがとうございます、ウル」

少し驚いた顔をしてから、ウルラートウスはフィットと顔を逸らして頭をわしゃわしゃと掻きまわった。

「勝手に略すな」

「だって長いんですもの」

「それもそうか」

マリアローゼがゴリ押すように言うと、ウルラートウスはフツと溜息を吐きながら答えた。怒ったように言っているが、真剣に怒っている感じはしない。見た目も態度も怖そうに見えるが、彼が心配しているのが伝わってくる。マリアローゼは嬉しくなって微笑み返した。

「また伺いますね！」

別れのお辞儀をして、無言で手を振るウルラートウスに背を向けると、次は治癒師のマリクのもとへ急いだ。

朝食前の静かな時間を終わらせるかのように、たむたむとノックする音が廊下に響く。マリアローゼの訪問に、中からのんびりとした声が出た。

「はいはい」

食堂からほど近い位置に、治癒師マリクの部屋がある。金茶の髪に垂れた緑の瞳の優しい青年で、治癒の魔力だけではなく医師としての診断も下せる優秀な人材だ。マリアローゼが魔力の枯渇で倒れた時も、ノクスとルーナを救った後も、マリクが見守ってくれた。

「マリアローゼ様、朝早くからどうされたんですか？」

「指を少しだけ傷つけてしまったので、薬をいただけませんか？」

あどけない声ながらも、いつも使用人に対しても丁寧な言葉を崩さないマリアローゼに、マリクは優しく微笑んだ。そして扉を大きく開けてマリアローゼを招き入れると、向かい合わせに座る。

「さあ、見せてください」

「左手の人差し指ですわ。でも、針で刺したので小さい傷なのです」

ぷにぷにとした柔らかい指には、確かに傷ついている箇所がある。マリクはじつと見つめて頷いた。

「薬で大丈夫そうですね。……あ、もしかして、薬を試すためにわざと怪我をしたのではないでしょうね？」

疑わしそうな視線を送られて、マリアローゼは慌てて左右に首をブンブン振った。

「わたくし、そんな酔狂ではございませんわ」

「なら、いいんですけどね」

マリクは手を伸ばして、薬棚のテーブルのように突き出している台に置いてある瓶を手取る。

その中の乳白色の軟膏（なんこう）を指で一掬（すく）いすると、それをマリアローゼの指に塗り込んだ。ピリツとした

痛みと、冷たくなめらかなクリーム感触がした後、痛みは一瞬で消えた。

「綺麗に消えていますわ……」

ほわあ、と感心したようにマリアローゼが息を吐くと、マリクはにっこりと笑顔を向けた。

「それは良かったです。で、まだ針仕事はしてはいないはずなのに、何故指に怪我を？」

椅子ごとガツチリ掴まれて、下りることも向きを変えることも出来ない状態で尋ねられる。

（何で……勉強内容が把握されてるの……）

マリアローゼはとりあえず目だけ逸らした。

「このままでは心配で、朝食も喉を通りません」

悪戯（いたづら）っぽい笑みを浮かべて、マリクは垂れた目を細める。

「あることを試したくて、それで……あの……針で突きましたの」

「あることとは何でしょう？」

理由を聞くまで逃がす気はないようだ。

（この笑顔の庄は……何だかシルヴァインお兄様を思い出すわ……）

マリアローゼはううつと呻（うめ）いて、口ごもりながらわけを話した。

「お兄様達からスライムをいただいたので、飼ひ馴らしたかったです……」

「スライム」

マリクが目を丸くして復唱する。

「あ、でも従魔師のウルラートウスに、捕獲（テイム）の仕方は教わっておりましたのよ。それで仲良くなれ

ましたの」

「はぁぁ。本当にお嬢様は、飽きないと言うか何とか……」

そう言いながらも、クックツと下を向いてマリクは笑っている。父にはウルラートウスから報告が行っているはずなのでお叱りは受けないだろう、とマリアローゼは考えているが、マリクからも何か言われたら立つ瀬がない。

「あの……マリク？」

「分かりました。たいした傷ではなかったので、報告はしないでおきましょう」

マリアローゼはマリクの言葉にほっと息をついて、改めて薬棚を見上げた。そういえば、気になることを思い出したのだ。

（スライムって、取り入れた物質に対しての耐性が付くはずよね？）

前世で読んだ色々な幻想世界やゲームの話である。

「あの、毒薬ってございます？」

「毒薬」

「出来たら、解毒薬とセットの」

「……また物騒なことを考えているわけじゃないですよね？」

マリクが剣呑な目で見てくるが、マリアローゼはふるふると首を横に振った。

「わたくしが使うわけではなくて、ロサに試してみたいのです。死んでしまったら嫌なので、薄められるものだ嬉しいですね」

「まあ、他でやられるよりはいいか……分かりました。用意致しましょう」

半ばやけくそになったんじゃないかという態度で、マリクは準備し始めた。小皿に入れた毒薬を薄め、その毒薬と解毒剤を入れたそれぞれのガラス瓶を机の上に用意する。マリアローゼは胸元からピンクのスライムを取り出すと、皿の上にそっと置く。

「見たことのない色してますね」

「あ、はい、珍しい子なんです」

ウルラートウスの助言通り、「わたしの血をあげたら染まりました」なんてことは言わない。

「ロサ……死なないでね……」

言いながら、マリアローゼは皿の縁に薄めた毒薬液を垂らす。

だが、ロサはそれが毒だと分かるのか、近づこうとしない。

「毒だと分かるのかしら……賢い！」

すでに親馬鹿目線である。でも、いざという時のために死なない程度に試しておきたい。スライムは毒や酸に強いはずなのだ。

「すぐにお薬をあげますから、少しだけ、ね？」

促すように背後から手を当てると、言われたことを理解したかのように、ロサはじりじりと毒へと向かった。すかさずマリアローゼは解毒薬の瓶を用意し、ロサが毒を取り込んだ瞬間、その身体に解毒薬を注いだ。スライムは人間と違って、触れた部分にそれぞれが即吸収される。

（体内で融合や中和してくれば、きっと大丈夫……！）

マリアローゼはロサを見守った。一緒に興味深げに見ていたマリクが嬉しそうに言う。

「あ、元氣ですね。原液もかけてみましようか」

ノリノリのマリクが薬棚から原液を持ってきた。

「え、え……あの、死んでは嫌なのですが……」

「一度耐性が付けば大丈夫です」

（生命を軽く見てはいないだろうか）

疑問に思いつつも、マリアローゼはマリクが瓶を傾けるのを見守る。

とぼとぼ。

ロサは身体にかかった毒薬液を取り込んだが、ぶるぶると元気に動いている。

「おお、大丈夫そうですね。次はどの毒を試しましょうか。あまり毒の種類も在庫もないのですが」

「いえ、あの、ちょ、ちよつとマリク、今日はもう結構ですわ」

「そうですか？」

至極残念そうに、マリクは手に取っていた毒薬を薬棚に戻した。物騒である。

（まさかマッドサイエンティストだったとは……医者だからサイエンティストではないかしら？）

考えつつも、マリアローゼはロサをささつと胸元に押し込んで隠した。

「この子だつて急に色んな毒に慣れるのは大変ですもの」

守るように両手を胸元に当てて言うと、マリクはにっこりと微笑んだ。

「必要なら集めておきますので、ご用命ください」

「そ……その時が来たら、お伝え致しますわ」

マリアローゼは椅子からびよこんと下りて、マリクの部屋を逃げるように後にした。

朝からあちこち走り回って疲れ気味ではあったが、贈り物をくれた兄達にお礼をして、従魔師の報告を受けた父の様子を窺^{うかが}うべく、とてとてと食堂へと向かった。

食堂に着くと、ちようど双子の兄達が扉の前でそわそわしながらマリアローゼを待ち構えていた。

「おはよう、ローゼ」

「俺達のプレゼントは氣に入った？」

嬉しそうに聞いてきた双子に、マリアローゼは満面の笑みを返す。

「最高ですわ。お兄様達の一流、ローゼはしかと受け取りましてよ」

照れたように笑う双子の手を引くと、椅子に上ってからそれぞれの頬に、マリアローゼはちゅつと唇を押し付けた。そして改めて考えてみて……あることに思い当たる。

（あら？ スライムをいただいて喜ぶ女性が少ないのでは??）

父も新たな問題を作った原因が双子だと気づいたのか、笑顔のままこめかみに青筋を浮かべている。

「あの、でも、お兄様達？ 人によっては卒倒する贈り物ですからね？」

一応念押しするマリアローゼに、二人はこくん、と素直に頷いた。そしてマリアローゼなら喜ぶ

と思って捕まえたんだと言わんばかりに、顔を見合せて笑っている。それはそれで複雑な気持ちだが、実際に嬉しいのは事実だ。

それに少なくとも二人は、マリ आरोーゼの『人を喜ばせてこそ一流』という言葉を考えて、それを実行に移したのだ。

マリ आरोーゼもにっこりと微笑んで、しかし父の視線に気づいて慌てて椅子から飛び下りた。

緊張する朝食を終えて、父と母は出かけていく。父から何かを言われることはなく、マリ आरोーゼはひとまずほっとしたが、やるべきことは決まっている。

「シルヴァインお兄様、キースお兄様。朝から忙しかったので、わたくしは一度休んで午後から図書館へ参ります」

「ゆっくり休んでおいで」

「無理はしないようにするんですよ」

兄二人は、それぞれふわりとマリ आरोーゼの頭を優しく一撫でして、図書館の方へ歩き去った。昨日から図書館で神聖国について調べているが、朝から移動し続けたので幼女の体力はもたないものである。一度ゆっくり休んでから、すっきりした頭で図書館に向かうべきだろう。

マリ आरोーゼはすかさず、仕事がないからか意気消沈しているノアークを捕まえる。

「お兄様、助手のお仕事がございます」

「……分かった」

喜びを押し隠したような顔で、ノアークは頷いた。ノアークを連れて部屋に戻ると、まずマリア

ローゼは丁寧に手紙をしたためた。温室を管理するエレパスに事情を伝えるためだ。

ロサに薬草を餌として与えて耐性を付けた後、「葉にも毒にもなる植物を与えてほしい」「様子を見ながら微量の毒草も与えてほしい」「マリクには絶対にロサを渡さないでほしい」などと書き連ねて、最後の一文には念のため二重線まで引いて強調した。

エイラはジェラルドから事情を聞いたのか、険しい目線を向けるものの何も言わなかった。彼女はミルリールームの実家、フォルティス公爵家から付いてきた侍女で、厳しいけれど優しい女性でもある。マリ आरोーゼの侍女になっているのは父と母の信頼の証だ。

エイラの様子を窺い^{うかが}つつも、自分で筆^{たんす}筒から小ぶりの箱を選んで取り出す。可愛らしいからと昔取っておいた小さな箱だ。エイラの目を盗んで胸元のロサを箱に移し、手紙と箱をノアークに手渡した。

「温室のエレパスに届けてくださいませ。用件は手紙に書いてあるので、ノアークお兄様はそのお手伝いもお願いします。」

「分かった」

力強く頷いて、ノアークが勢い良く部屋を出ていく。

「お嬢様、お風呂に入られますか？」

「ええ、そうします。お昼まで休みますわね」

エイラと小間使い達に世話をされて、マリ आरोーゼは心地よい眠りについたのだった。

第二章 神聖国の勉強

正午の鐘の音で目覚めたマリアローゼは、エイラに身支度を整えてもらい食堂に向かう。

兄達と食事をしていると、珍しくケレスがやってきて食堂の隅に待機した。この屋敷の家令であり、先々代の時から仕えている老齢の執事だ。白髪を後ろに撫でつけ、同じく歳のせいで白くなった口髭を蓄え、穏やかな微笑みを浮かべている。

全員が食べ終わり、食後のお茶を飲んでいると、ケレスに声をかけられた。

「シルヴァイン様、マリアローゼ様、お茶がお済みになりましたら、別館へご案内致します」

「わたくし達の旅に同行してくださる方達へのご挨拶ですわね？」

「左様でございます」

ケレスが目を細めてにこり、と上品に微笑む。

「というわけで、キース。お前は先に図書館へ行っていてくれ」

「分かりました。作業を進めておきます」

シルヴァインが言うと、キースは席を立てて図書室へと向かう。マリアローゼもお茶を飲み終わると、シルヴァインの差し出した腕に掴まり、別館へと歩き出した。

別館にも本館と同じくらいの広さの食堂があり、そこに一同が会していた。静かに歓談していた

ようだが、ケレスの紹介で全員が席から立ち上がって敬礼をする。

「このたびはご足労いただき感謝しております。フィロソフィ公爵家が息女、マリアローゼにございます」

「兄のシルヴァインです。父に代わり、同道を許可していただきました。よろしくお願い致します」

二人の丁寧な挨拶に、騎士達の何人かは少し驚いた様子を見せる。

まず挨拶を返したのは、マグノリア・フィデーリス。『神罰の乙女』とも『正義の剣』とも言われる実直な神殿騎士で、王妃に推挙された人物である。栗色の髪は編んでまとめられており、青く澄んだ瞳は優しい色を湛えている。

マリアローゼの両親と学友であり、信頼出来る人物だと説明を受けていた。しかも、公爵邸に仕える侍女長フィデーリス夫人の実の娘である。言われてみれば確かに似ていた。いつも微笑みを絶やさないフィデーリス夫人の柔らかい雰囲気とは異なるが、同じ色の髪と瞳をしている。

「王妃殿下直々に、この栄誉ある旅行きに任命されました。マグノリア・フィデーリスにございます。御身を必ず安全に神聖国までお届け致しますので、ご安心ください」

ピシッと敬礼をする姿は、さすが武人だ。

そして順番に五人の神殿騎士の挨拶があり、次は王城から来た王宮騎士達の番になる。

「アケル・フォルティスでございます」

双子の兄達と同じフォルティス家に多い赤髪に、王妃と同じ紅の目。この人も攻略対象だろうかと思うほどの、ちよつと野性味のある甘い顔立ちに、ガッチリしすぎていない細マッチョ。若く

して第一騎士団長を務めている精鋭である。母や王妃と従兄弟だという話は聞いていた。

(お母様よりも、王妃寄りの見た目ね)

そんなことを思いつつマリアローゼはお辞儀を返す。アケルが三人の部下を紹介してスッと一歩下がると、そこには第一王子のアルベルトがいた。

「で――」

殿下、と言おうとしたマリアローゼに、アルベルトは指先を口に当てて何も言わないように示す。

「従者として派遣されたアルと申します」

「同じく従者として同行致します、テースタでございます」

イケオジのテースタは、ロランドへの罰という名の公爵邸職業見学に一緒に来ていた執事だ。侍従というよりも、王や王妃にとつて信頼出来る部下のような立場だろうか。パリッとお仕着せを着こなしているが、そういえばアルベルトも同じようなお仕着せを着ている。

マリアローゼがどういうこと？ という疑問を込めて騎士達を見ると、目を逸らしたり伏せたりされてしまった。アケルだけはさすがと言うべきか、にっこり微笑みを返す。

「公爵家の使用人ルーナでございます。こちらは弟のノクスでございます。マリアローゼお嬢様に命を救われました」

自己紹介をして敬礼するルーナとノクスを、マゲノリアがじつと見つめている。それは何かを探るような視線で、けれど悪意は感じられなかった。

(何かしら?)

マゲノリアは隣にいるカレンドウラという、神殿騎士には到底見えない金の巻き毛に濃紫の瞳の妖艶な美女に視線を送る。すると彼女もルーナとノクスに注いでいた視線を外し、マゲノリアに頷き返す。

明らかに特殊な魔法か能力を使って何かを確認していた気がする。マリアローゼはじつとマゲノリアを見つめた。

「ああ、失礼。私は嘘を見抜く加護を持っておりますので、彼女の言葉に嘘がないか確認させていただきますました」

いきなり能力を暴露したので、逆にマリアローゼがびっくりした。

「加護というものは、神殿騎士様や司祭様が神様からいただく恩寵のことですわね？」

「はい。ほとんどの神職者は秘匿しておりますが、私は役目柄公表しております」

「私も隠すほどの能力じゃないので、公表しておりますよ。闇夜でも目が利く暗視能力です」

軽薄そうな様子で割って入ったのは、ジュリアンという名前の美青年だ。女性に好かれるであろう綺麗な顔立ちで、肩までの金髪は後ろ髪を束ねていてもっと長い。目は銀色なのか灰色なのか、不思議な色をしていた。

多分、二人はカレンドウラの能力を悟らせたくないのだろう。それだけ神殿にとっては貴重な能力だと推測出来た。

(きつと、私を推挙した神父が神父だから、実際にルーナ達の身に何があったのか探りたかったのね)

守る相手が本当に聖女か否か、彼らにとっても問題なのは分かる。貴重な能力の内容を知りたくはあるが、あえて踏み込む必要はない。

マリアローゼはマグノリア達の目をじっと見つめた。

「神様は、目に宿りますのね」

神聖教関連の蔵書にはまだ目を通し切れていないが、おおよその見当を付けてマリアローゼは微笑んだ。ルーナ達を見ていたし、暗視能力も目に宿る力だ。

すると、何故か彼らは驚いた表情を見せた。

「……なるほど。利発なお嬢様だとお聞きしておりましたが、感服致しました」

真面目な顔でマグノリアにそう持ち上げられると、逆に恥ずかしい。

（これはやっちゃったのかしら？）

加護のことはあまり公表されていない。公にされているのは、神殿騎士の中でも聖騎士と呼ばれる一部の精鋭が加護を得ているという話くらいである。加護は神の恩寵であり、信仰心を示す証でもあるので、加護を得ていない者は聖騎士にはなれない。

この辺りは、よくある「聖騎士なのに、性格悪いのは何故？」問題の解決に繋がる。聖騎士になるには、技能や能力値ではなく、どれだけの信仰心を持っているかということも重要だからだ。彼らは神殿騎士としか名乗っていないが、王国の精鋭、聖騎士である可能性が高い。

（暗に身分を明かすことで、信頼関係を築こうとしているのかもしれないわね）

当然ながら、加護に関する情報は外部には秘匿されているし、聖騎士と名乗らずに活動している

神殿騎士も少なくない。

（目の前で起こったことを、見たまま口にしてしまったのは良くなかったかも……）

自分の迂闊さに、マリアローゼはどんよりと落ち込んだ。困り顔で傍らのシルヴァインを見上げると、シルヴァインは安心させるように優しくニコツと微笑む。そして、ノクスとルーナの横に控えている護衛騎士をさっと手で指し示した。

「我が家の護衛騎士にも自己紹介してもらいましょう」

そつなく話題を変えて話を戻すシルヴァインに、マリアローゼは素直に感心した。

そう促されて、顔馴染みの護衛騎士の一人、フェレスがにこやかに挨拶をする。二人目はウルススという巨軀の男性だ。短い茶色の立ち上がった髪と、同じく茶色の瞳と身体の大きさから、何となく熊を連想させる。彼も本屋に行った時に護衛をしてくれた一人で、父がマリアローゼと少しでも接点のある者を選んだのだろう。

三人目はパーウエルという。確か王城から帰る時に御者台にいた人物で、ランバートと会話していた護衛騎士だ。暗めの金髪で、目も黒に近い深い青色をしている。

そして、最後にカンナが挨拶をした。

「せっかくなのでお茶に致しましょう」

マリアローゼが小さな手を叩いてケレスを振り向くと、老齢の家令は心得たように敬礼をして背後を振り返る。目線で合図を送ったのか、すぐにお茶が運ばれてきた。ノクスとルーナは、給仕することはあってもされることがないからか、居心地悪そうにもじもじしている。

「そういえば、出発は遅らせるという話を伺っていますが」

それぞれお茶を味わう中、アケルが口火を切った。

「はい。わたくし不勉強でございました。ルクスリア神聖国や神聖教のことはあまり詳しくありません。ですので、少しお勉強する時間をいただきましたくて……お父様をお願いして一週間ほど頂戴致しました」

「ほう、それは素晴らしい心がけです」

アケルはにこやかに言葉を返す。

「ですが、本格的な勉強はルクスリア神聖国に行ってからでもいいのでは？」

もっともなことを口にしたのはユーグ。神殿騎士の一人で、とても真面目そうな青年だ。金髪碧眼で、髪は緩やかな七分けである。

(七三、覚えやすい方)

心の中でマリアローゼは頷いた。

「いいえ。わたくしは神聖国には参りますけど、すぐに帰りますので」

「えっ」

真面目な七三が紅茶を零しそうにしながら言う。そこに追い打ちをかけるように、マリアローゼは胸を張って自信満々に言い放った。

「わたくしは聖女じゃございませんので」

「「えっ」」

今度はマグノリア以外の神殿騎士が声を揃えて驚き、固まった。マリアローゼの隣ではシルヴァインがおかしそうに、笑いを堪えている。アルベルトは澄ました顔をしているが、口元がひくひくしていた。兄とアルベルトは笑いのツボが似ているのだ。

「その件は王妃様に伺っているが、何故そう思われるのかお聞きしてもよろしいか？」

真摯な眼差しで聞いてきたマグノリアに、マリアローゼは頷き返した。

「一つ目は、わたくしの力が不確定なことですわ。ノクスとルーナを助けたいと願い、二人は命を繋ぎ止めた。それだけを見れば、確かに何らかの奇跡が起きたのでしょうか。でも、それがわたくしの力だとあなたが証明するのでしょうか？ ただ一度の奇跡の可能性もありますし、望んで奇跡を起こせる可能性はとても低いです」

マリアローゼの目を見つめながら、マグノリアがふむ、と頷く。

「二つ目は、聖女様が複数降臨される可能性がとても低いということ。すでにルクスリア神聖国では、男爵令嬢が聖女ではないかと噂されていると聞いておりますし、更に他にもいらっしゃるかもしれません」

「いるのですか？」

「確信は持っておりますけれど、証明は出来ません」

(すでに一人目が聖女と名乗り出ているのが、そもそもイレギュラーなのよね)

この世界の「ヒロイン」枠には、聖女が複数人いるはずだ。

一卷に一人だけ出てきたヒロインは、前世の記憶で唯一知っているヒロインだが今は平民だし、

どこに住んでいるのかも明確にされていない。彼女はアウアリティア王国の民であるし、まだ小説のスタート地点ですらない今、ルクスリア神聖国に現れるのはおかしい。もし王国の男爵令嬢ならば、まずは王都の教会に姿を現すはずだ。だから、彼女以外の誰かが聖女を騙^{かた}っていると確信したのだ。

とはいえ、根拠が足りなさすぎるし、予言などと言い出せば余計に聖女だと思われるしまう。

「わたくしは、わたくしにかけられた聖女という嫌疑を晴らしに行くだけですの」

「嫌疑……」

ふんす！ と力強く胸を張ると、神殿騎士達はとても微妙な顔をした。自らが戴く宗教の上位に存在する役職を、まるで悪いものかのように扱われればそうなるだろう。

（気持ちばかりです。でも、こちらにとっては、とても迷惑なものも分かっていたきたい）

身分が低くて何とかの上がりたいたいのであれば受け入れるだろうが、マリアローゼは家族と離れたくないのである。

「そもそもわたくし、聖女の役割がまだよく分かっています。何故、癒す力がありながら、野に出て困っている人々を救わないのでしょうか？ 聖女の稀有^{けう}な力は、身分の高い方達だけが独占して良いものなのでしょうか？」

「それは……」

神殿騎士達は、途端に困った顔をして言葉に詰まる。

面と向かってそんな疑問をぶつけてくる人間が周囲にいないのだろう。確かに、神殿騎士に敵愾

心を持たれかねない言葉だ。同職の人間でも信仰心がある以上、口にしにくい繊細な問題なのである。

「同感です」

マグノリアだけが即答した。その目は真っ直ぐで、マリアローゼは少しだけほつとする。

（高位の神職者でありながら、疑問視出来る方もいるのね）

だが、マリアローゼは再び神殿騎士達を見回しつつ、心を込めて言葉を紡いだ。

「ですが、これは物を知らない故の幼稚な疑問なのかもしれませんから、学ぶ時間をいただきたいのです。何故そうなってしまったのか、わたくしは知りたいのです」

「神聖学を学んできたこの身にとっても、未だ答えの出ない疑問です。マリアローゼ様のお気持ち、承知致しました。貴女を無事連れ帰ることを改めてお約束致します」

周囲の神殿騎士、特に七三が何か言いたげではあったが、マグノリアの決定に口を挟まなかった。役職的に上ということもあるだろうけれど、誰にも文句を言わせないという迫力を彼女が発していたからかもしれない。

マリアローゼは口にしなかったが、実は学びたい理由はもう一つある。それは、敵をまず識^しる、ということ。

（戦う相手のことを知らないと、勝負にならないもの）

これから神聖国に向かい、自由を勝ち取って大手を振って帰りたいのだ。

家族と過ごす人生を邪魔する相手は敵である。それが一大宗教の総本山であろうと、同じだ。彼

らに崇められる聖女の座などちつとも欲しくない。そんなことを口にしたらさすがに神殿騎士の心証を悪くしてしまうので、ここでは言わないが。

マリアローゼは騎士達に微笑みながら小さく会釈した。

「ご理解いただき、ありがとうございます。それでは早速図書館に参りたいと思いますので、ここで失礼致します」

「私もここで失礼致します」

シルヴァインもマリアローゼに続いて立ち上がり、二人で揃ってお辞儀と敬礼をする。

「私も失礼します」

アルベルトも立ち上がると、図書館に行くというマリアローゼ達に歩み寄った。

「私達も仕事に戻ります」

ノクスとルーナも揃ってお辞儀したところで、フェレスが神殿騎士達に向けて声をかける。

「んじゃ、練兵場に行きましょうか。一つお手合わせ願います」

ニカツと笑うフェレスに、他の騎士達も立ち上がった。

そうしてマリアローゼとシルヴァインは、それを見送ってから図書館に向かったのである。



ノアークは未だ温室に行ったことはない。

というよりは、温室の存在に気づいていなかった。主な移動先は屋敷と練兵場で、厩舎や兵舎を通り過ぎることはあつたし、自分の武器を作ってもらったこともあるので鍛冶工房も知っている。

先程愛しい妹であるマリアローゼから手紙と箱を預かったものの、温室の場所が分からずに部屋から飛び出たところで立ち止まった。部屋の脇に自分の侍従が待機しているのを見つけて、ほっと息をつく。

「……温室に行きたい」

「承知致しました」

ノアークの侍従はゾアと言う。艶やかな黒髪はうねるように波打ち、暗い紫をした瞳は物憂げで、屋敷の小間使い達にも人気の青年だ。余計な言葉は口にせず、余計なこともしない、空気のような存在だとノアークは認識している。

先導して歩いていくゾアの姿勢は模範になるくらい美しく、彼が公爵家の人間だと言われれば誰もが納得するに違いない。後ろを歩きながらノアークはそんなことを考えていた。

同じ歳のアルベルト第一王子が、マリアローゼのために危険な旅に同行するという。長兄であるシルヴァインも、それを聞いて一も二もなく自分も行くと言乗りを上げた。

でも、ノアークは言い出せずにいた。魔法が使えないからである。

(俺は役立たずの無能者だ……)

剣の腕はシルヴァインといい勝負が出来るほどだが、魔法が使えないということは片翼がないのと同じだ。仮に自分も行くと言張しても、足手まといだと言われるだろう。そんなノアークを心か

ら愛していると堂々と言ってくれるのは、何よりも大事な妹のマリアローゼだけだ。

ノアークは後ろ向きになりがちな気持ちを振り切るように、深呼吸をする。

温室に足を踏み入れると、むせ返るような緑と花の匂いがした。太陽の光を取り入れているからか、少しだけ蒸し暑い。きよるきよると辺りを見回すが人影はない。道が左右と真ん中に延びているので、少し考えてから左側を進む。しばらく歩くと、人影が見えてきた。

「エレパースはいるか？」

声をかけると、作業着を着た中年の男が奥に向かって呼びかける。

「エレパースさん、お客さんだよ」

「あつ、は、はい……」

返事がしてしばらくすると、跳ねた長い赤髪の大きな男がのっそりとやって来た。そして、困ったような表情で用件を尋ねる。

「エレパース、です。な、何か？」

「これを妹から預かってきた」

箱と手紙を差し出すと、エレパースは驚いた後で不思議そうな顔になった。

汚さないように手袋を外してから、エレパースは遅い手で手紙と箱を受け取り、紙面に視線を落とす。とても大きくて立派な体躯たいくをしているのに、何故か怯おそえたような反応を返すエレパースが、ノアークの目には奇妙に映った。

（俺があんな風だったら、ローゼを守るのに）

同年代の子供達に比べれば身体は大きい、ノアークも子供だ。大人の、それも遅い男と比べれば何もかもが足りない。

エレパースは手紙を何度かじっくり読んでから、うんうんと頷いた。

「分かりました、とお伝えください。……こ、これから作業します」

「……分かった」

ペコペコと頭を下げて、エレパースは箱を大事そうに抱えて温室の奥に向かう。ノアークはその後ろを付いていった。

「あ、あの？」

「……手伝うように言われた」

まだ何か用か？ とびくびくする大男に、ノアークは理由を告げる。困ったように首を傾げて、エレパースはもう一度口を開く。

「僕一人でも手は足りるので……だ、だいじょ——」

「……手伝う」

「え、えっと……」

「……手伝う」

困り顔のままエレパースが背後に佇たずむノアークの侍従を見るも、ゾアは何も言わずに首を横に振るだけだった。

「じゃ、じゃあこれを……」

エレパースは大事そうに抱えていた箱を、ノアークに差し出す。ノアークが受け取ると、エレパースはどこからか椅子を持ってきて、ノアークの隣に置いた。座れということだろうか？　と思いが、ノアークはその椅子に腰掛ける。

その後エレパースはどこかに行き、しばらくして草を手に戻ってきた。そして何種類かの草をノアークに差し出す。

「こ、これをあげてください……」

箱の方に手を近づけたので、ノアークは蓋をパカリと開けた。中にはピンクのスライムがぷよぷよと動き回っている。

無言でエレパースから草を受け取ると、上からパラパラとスライムに落としてみた。身体の上に残った葉はそのまま沈み込み、下に落ちた葉はスライムが身体を伸ばして溶かす。

全てなくなったのを確認して、ノアークは残りの草もパラパラとスライムに与えた。箱の中をゆったり動き回って全ての草を吸収し終わると、スライムがぷるぷると震える。

ノアークが顔を上げると、エレパースが鉢植えのたくさん載った板を持つてのそのそと歩いてくるところだった。足元にそれを置くと、端っこの鉢植えを手渡してくる。ノアークは少しずつプチプチと葉を塗り、同じように与えた。与え終わった鉢は別の場所に置き、次の鉢に手を伸ばす。それを見守っていたエレパースは、またのそのそと奥へ歩いていった。

たとえ誰にでも出来る簡単な仕事だとしても、愛しい妹マリアローゼの頼みだと思えば、ノアークには何の苦にもならない。

(……もっと、頼れる兄になるう)



シルヴァインがマリアローゼと共に図書館に向かって歩き出すと、後ろからアルベルトが付いてきた。気づいて振り返ったマリアローゼに、アルベルトが優しく微笑む。

「私も手伝わせてもらうよ」

「で……」

「アルと呼んでくれないか？」

出鼻を挫かれて、お辞儀も途中で止めたマリアローゼは頷いた。王族でありながら、お仕着せを身に纏ってまで危険な旅に同行するアルベルトを、シルヴァインはじっと見つめる。

マリアローゼは全く気づいていないが、これは立場と権利を利用した、恋慕による行動だ。王国にいる唯一の公爵令嬢という、稀有な存在であるマリアローゼを連れ帰るための布石の一つ。

従兄妹であることを除いても、美しさも血統も王族の配偶者としては遜色ない。母の実姉である

王妃カメリアは、マリアローゼと母ミルリーウムの気持ち尊重して婚約話を出してはいないが、国王陛下は別だ。時折、父ジェラルドとも攻防を繰り返しているという。

そしてまた、第一王子のアルベルトも第二王子のロランドも、マリアローゼに少なくない好意を寄せている。いずれは、婚約者に、王妃にと望んでいるのだろう。だからこそ、危険な旅にもかか

わらず、国王夫妻は同意したのだ。

マリアローゼはアルベルトの提案に快く頷いた。

「では、アル。わたくしのことはローゼとお呼びください」

「ありがとう、ローゼ」

アルベルトの神々しい笑顔に、マリアローゼは何か考えていたようだが、のぼせているわけではなさそうだ。本当は愛称で呼ぶことなど許したくはなかったが、仕方ない。

シルヴァインはマリアローゼの肩に手を回して、促した。

「さあ行こう」

ちらりと、アルベルトの目に嫉妬とも羨望ともつかない光が宿ったのを見ながら、シルヴァインは優雅な笑みを浮かべたまま歩き出した。

別館を出て、長い廊下を歩いて図書館へと向かう。道すがら、何かを言い出そうとするアルベルトの機先を制して、シルヴァインはマリアローゼに話しかける。何も気づいていないマリアローゼは、大きな瞳を向けて商会や魔道具の話に食いついた。

「依頼していた護身の笛が完成したと、レノとクリスタから進呈いただきました」

レノとクリスタは、公爵家お抱えの魔道具師の姉弟である。闊達な姉と不愛想な弟は、二人共よく似た褐色の肌と金の髪に若葉色の瞳をしていた。幼い頃に才能を開花させて以来、公爵家で新しい魔道具を作り続けている。

「大きな高い音が出せるらしいね」

「ええ。居場所を知らせるだけの道具ですが、非常時に役に立つと思います」

にこにこ告げるマリアローゼの愛くるしい顔を見ながら、シルヴァインも微笑み返す。

マリアローゼは美しく愛らしいだけではない。発想の豊かさと、そして民への献身までもを兼ね揃えていて、国民にとって得難い王妃になるに違いない。

(けれど、渡したくはないな)

シルヴァインがアルベルトに些細な意地悪をしていたと知れば、マリアローゼはまあいい頬を更に膨らませて怒るだろう。だが、シルヴァインはやめる気はなかった。

せめて、今は――

図書館に着くと、シルヴァインに促されてマリアローゼは昨日と同じ長机に座った。対面にシルヴァインも着席して、先に来ていたキースと共に四人で神聖国関連の蔵書を読み進める。

静かな図書館内に頁を繰る音や、紙に書きつけるペンの音だけが微かに響く。やがて夕刻の鐘が鳴り響いて、マリアローゼはハツとしたように顔を上げた。辺りを見回している様子から、窓を探しているようだ。

しかし、図書館には外が直接見える窓はない。外をぐるりと囲む廊下の窓と、図書館にある窓が互い違いに設置されているので、廊下に入る光が図書館の窓から漏れている。本の劣化を避けるために、直射日光が当たらない設計になっているのだ。とはいえ、図書館に入ってくる光は限られているので、長机に灯を置いている。

マリアローゼは疲れを見せぬかのように、小さな顎にふつくらとした指を当てて口にした。